日蓮大聖人御書全集

上野殿母御前御返事（四十九日菩提の事）

うえのどののはごぜんごへんじ

しじゅうくにちぼだいこと

新版1905～1912

上野殿母御前御返事（四十九日菩提の事）

弘安3年('80)10月24日　59歳　上野尼

南条故七郎五郎殿の四十九日御菩提のために送り給う物の日記のこと。鵝目両ゆい・白米一駄・芋一駄・すりどうふ・こんにゃく・柿一籠・ゆ五十等云々。

御菩提の御ために、法華経一部・自我偈数度・題目百千返、唱え奉り候い畢わんぬ。

そもそも法華経と申す御経は、一代聖教には似るべくもなき御経にて、しかも「ただ仏と仏とのみ」と説かれ

て、仏と仏とのみこそしろしめされて、等覚已下、乃至凡夫は叶わぬことに候え。されば、竜樹菩薩の大論には、「仏已下はただ信じて仏になるべし」と見えて候。

法華経の第四の法師品に云わく「薬王よ。今汝に告ぐ。我が説くところの諸経、しかもこの経の中において、法華は最も第一なり」等云々。第五の巻に云わく「文殊師利よ。この法華経は、諸仏如来の秘密の蔵にして、諸経の中において最もその上に在り」等云々。第七の巻に云わく「この法華経もまたかくのごとく、諸経の中において、最もこ

れその上なり」。また云わく「最もこれ照明なり。最もこれその尊なり」等云々。これらの経文、私の義にあらず。仏の誠言にて候えば、定めてよもあやまりは候わじ。

民が家に生まれたる者、「我は侍に斉し」なんど申せば、必ずとが来る。まして「我、国王に斉し」、まして「勝れたり」なんど申せば、我が身のとがとなるのみならず、父母と申し、妻子といい、必ず損ずること、大火の宅を焼き、大木の倒るる時小木等の損ずるがごとし。

仏教もまたかくのごとく、華厳・阿含・方等・般若・大日経・阿弥陀経等に依る人々の、我が信じたるままに、勝劣も弁えずして、「我が阿弥陀経等は法華経と斉等なり」、はたまた「勝れたり」なんど申せば、その一類の人々は我が経をほめられうれしと思えども、還ってとがとなりて、師も弟子も檀那も悪道に堕つること、箭を射るがごとし。ただし、「法華経の一切経に勝れり」と申して候はくるしからず。還って大功徳となり候。経文のごとくなるが故なり。

この法華経の始めに無量義経と申す経おわします。譬えば、大王の行幸の御時、将軍前陣して狼籍をしずむるがごとし。その無量義経に云わく「四十余年にはいまだ真実を顕さず」等云々。これは、将軍が大王に敵する者を大弓をもって射はらい、また太刀をもって切りすつるがごとし。華厳経を読む華厳宗、阿含経の律僧等、観経の念仏者等、大日経の真言師等の者どもが法華経にしたがわぬをせめなびかす利剣の勅宣なり。譬えば、貞任を義家が責め、清盛を頼朝の打ち失せしがごとし。無量義経の「四十余年」の文

は、不動明王の剣索、愛染明王の弓箭なり。

故南条五郎殿の、死出の山・三途の河を越し給わん時、煩悩の山賊、罪業の海賊を静めて、事故なく霊山浄土へ参らせ給うべき御供の兵者は、無量義経の「四十余年にはいまだ真実を顕さず」の文ぞかし。

法華経第一の巻の方便品に云わく「世尊は法久しくして後、要ず当に真実を説きたもうべし」。また云わく「正直に方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ」云々。第五の巻に云わく「ただ髻中の明珠のみ」。また云わく「独り王の

頂上にのみこの一つの珠有り」。また云わく「彼の強力の王の久しく明珠を護れるに、今乃ちこれを与うるがごとし」等云々。文の心は、日本国に一切経わたれり。七千三百九十九巻なり。彼々の経々は皆、法華経の眷属なり。例せば、日本国の男女の数、四十九億九万四千八百二十八人候えども、皆、一人の国王の家人たるがごとし。

一切経の心は、愚癡の女人なんどのただ一時に心うべきようは、たとえば大塔をくみ候には、まず材木より外に、足代と申して多くの小木を集め、一丈二丈ばかりゆいあ

頂上にのみこの一つの珠有り」。また云わく「彼の強力の王の久しく明珠を護れるに、今乃ちこれを与うるがごとし」等云々。文の心は、日本国に一切経わたれり。七千三百九十九巻なり。彼々の経々は皆、法華経の眷属なり。例せば、日本国の男女の数、四十九億九万四千八百二十八人候えども、皆、一人の国王の家人たるがごとし。

一切経の心は、愚癡の女人なんどのただ一時に心うべきようは、たとえば大塔をくみ候には、まず材木より外に、足代と申して多くの小木を集め、一丈二丈ばかりゆいあ

げ候なり。かくゆいあげて、材木をもって大塔をくみあげ候いつれば、返って足代を切り捨て、大塔は候なり。足代と申すは一切経なり、大塔と申すは法華経なり。仏一切経を説き給いしことは、法華経を説かせ給わんための足代なり。

「正直に方便を捨つ」と申して、法華経を信ずる人は、阿弥陀経等の南無阿弥陀仏、大日経等の真言宗、阿含経等の律宗の二百五十戒等を切りすて抛ってのち、法華経をば持ち候なり。大塔をくまんがためには足代大切なれど

結上　組上

も、大塔をくみあげぬれば、足代を切り落とすなり。「正直に方便を捨つ」と申す文の心これなり。足代より塔は出来して候えども、塔を捨てて足代をおがむ人なし。今の世の道心者等、一向に南無阿弥陀仏と唱えて一生をすごし、南無妙法蓮華経と一返も唱えぬ人々は、大塔をすてて足代をおがむ人々なり。世間に「かしこくはかなき人」と申すはこれなり。

故七郎五郎殿は、当世の日本国の人々にはにさせ給わず、おさなき心なれども、賢き父の跡をおい、御年いまだ

はたちにも及ばぬ人が、南無妙法蓮華経と唱えさせ給いて仏にならせ給いぬ。「一りとして成仏せざることなけん」はこれなり。乞い願わくは、悲母、我が子を恋しく思しめし給いなば、南無妙法蓮華経と唱えさせ給いて、故南条殿・故五郎殿と一所に生まれんと願わせ給え。一つ種は一つ種、別の種は別の種、同じ妙法蓮華経の種を心にはらませ給いなば、同じ妙法蓮華経の国へ生まれさせ給うべし。三人、面をならべさせ給わん時、御悦びいかがうれしく思しめすべきや。

そもそも、この法華経を開いて拝見仕り候えば、「如来は則ちために衣をもってこれを覆いたもう。また他方の現に在す諸仏の護念したもうところとならん」等云々。経文の心は、東西南北・八方ならびに三千大千世界の外、四百万億那由他の国土に、十方の諸仏ぞくぞくと充満せさせ給う。天には星のごとく、地には稲麻のように並み居させ給い、法華経の行者を守護せさせ給うこと、譬えば大王の太子を諸の臣下の守護するがごとし。ただ四天王一類のまぼり給わんことのかたじけなく候に、一切の四天王、

一切の星宿、一切の日月、帝釈・梵天等の守護せさせ給うに足るべきことなり。その上、一切の二乗、一切の菩薩、兜率内院の弥勒菩薩、迦羅陀山の地蔵、補陀落山の観世音、清涼山の文殊師利菩薩等、各々眷属を具足して法華経の行者を守護せさせ給うに足るべきことに候に、またかたじけなくも、釈迦・多宝・十方の諸仏の、てずからみずから来り給いて、昼夜十二時に守らせ給わんことのかたじけなさ、申すばかりなし。

かかるめでたき御経を故五郎殿は御信用ありて仏にな

らせ給いて、今日は四十九日にならせ給えば、一切の諸仏、霊山浄土に集まらせ給いて、あるいは手にすえ、あるいは頂をなで、あるいはいだき、あるいは悦び、月の始めて出でたるがごとく、花の始めてさけるがごとく、いかに愛しまいらせ給うらん。

そもそも、いかなれば三世十方の諸仏はあながちにこの法華経をば守らせ給うと勘えて候えば、道理にて候いけるぞ。法華経と申すは、三世十方の諸仏の父母なり、めのとなり、主にてましましけるぞや。かえると申す虫は母の音を

食とす。母の声を聞かざれば生長することなし。迦羅求羅からぐらと申す虫は風を食とす。風吹かざれば生長せず。魚は水をたのみ、鳥は木をすみかとす。仏もまたかくのごとく、法華経を命とし、食とし、すみかとし給うなり。魚は水にすむ。仏はこの経にすみ給う。鳥は木にすむ。仏はこの経にすみ給う。月は水にやどる。仏はこの経にやどり給う。この経なき国には仏ましますことなしと御心得あるべく候。

古昔、輪陀王と申せし王おわしき。南閻浮提の主なり。

この王はなにをか供御とし給いしと尋ぬれば、白馬のいななくを聞いて食とし給う。この王は、白馬のいななけば年も若くなり、色も盛んに、魂もいさぎよく、力もつよく、また政事も明らかなり。故に、その国には白馬を多くあつめ、飼いしなり。譬えば、魏王と申せし王の鶴を多くあつめ、徳宗皇帝のほたるを愛せしがごとし。白馬のいなくことは、また白鳥の鳴きし故なり。さればまた、白鳥を多く集めしなり。

ある時、いかんがしけん、白鳥皆うせて白馬いななかざ

りしかば、大王、供御たえて、盛んなる花の露にしおれしがごとく、満月の雲におおわれたるがごとし。この王既にかくれさせ給わんとせしかば、后・太子・大臣・一国、皆母に別れたる子のごとく、皆色をうしないて涙を袖におびたり。いかんせん、いかんせん。

その国に外道多し。当時の禅宗・念仏者・真言師・律僧等のごとし。また仏の弟子も有り。当時の法華宗の人々のごとし。中悪しきこと水火なり。胡と越とに似たり。大王、勅宣を下して云わく「一切の外道この馬をいななかせば、

仏教を失って一向に外道を信ぜんこと諸天の帝釈を敬うがごとくならん。仏弟子この馬をいななかせば、一切の外道の頸を切り、その所をうばい取って仏弟子につくべし」と云々。外道も色をうしない、仏弟子も歎きあえり。

しかれども、さてはつべきことならねば、外道は先に七日を行いき。白鳥も来らず、白馬もいななかず。後七日を仏弟子に渡して祈らせしに、馬鳴と申す小僧一人あり。諸仏の御本尊とし給う法華経をもって七日祈りしかば、白鳥壇上に飛び来る。この鳥、一声鳴きしかば、一馬、一声

いななく。大王は馬の声を聞いて病の牀よりおき給う。后より始めて諸人、馬鳴に向かって礼拝をなす。白鳥、一・二・三乃至十・百・千出来して国中に充満せり。白馬しきりにいななき、一馬二馬乃至百・千の白馬いななきしかば、大王この音を聞こしめし、面貌は三十ばかり、心は日のごとく明らかに、政正直なりしかば、天より甘露ふり下り、勅風万民をなびかして、無量百歳、代を治め給いき。

仏もまたかくのごとく、多宝仏と申す仏は、この経に

あい給わざれば御入滅、この経をよむ代には出現し給う。釈迦仏・十方の諸仏もまたまたかくのごとし。かかる不思議の徳まします経なれば、この経を持つ人をば、いかでか天照太神・八幡大菩薩・富士千眼大菩薩すてさせ給うべきと、たのもしきことなり。またこの経にあだをなす国をば、いかに正直に祈り候えども、必ずその国に七難起こって、他国に破られて亡国となり候こと、大海の中の大船の大風に値うがごとく、大旱魃の草木を枯らすがごとしと思おぼしめせ。当時、日本国のいかなるいのり候とも、日蓮

が一門・法華経の行者をあなずらせ給えば、さまざまの御いのり叶わずして、大蒙古国にせめられて、すでにほろびんとするがごとし。今も御覧ぜよ。ただかくては候まじきぞ。これ皆、法華経をあだませ給う故と御信用あるべし。

そもそも、故五郎殿かくれ給いて既に四十九日なり。無常はつねの習いなれども、このことはうちきく人すら、なおしのびがたし。いおうや、母となり妻となる人をや。心のほどおしはかられて候。人の子にはおさなきもあり、おとなしきもあり、みにくきもあり、かたわなるもあり、

思
おもいになるべきにや、おのこごたる上、かたわにもなし、
男子 うえ
弓矢障
ゆみやにもささいなし、心もなさけあり。故上野殿には盛
こころ情 こうえのどの さか
んなりし時おくれてなげき浅からざりしに、この子をはら
とき後 歎 あさ こ孕
みていまださんなかりしかば、火にも入り水にも入らんと
産 ひ い みず い
思いしに、この子すでに平安なりしかば、誰にあつらえて身
おも こ へいあん たれ 誂 み
をもなぐべきと思って、これに心をなぐさめて、この
投 おも こころ 慰
十四・五年はすぎぬ。
じゅうし ごねん 過
いかにいかにとすべき。二人のおのこごにこそになわれ
ふたり 男子 担
めと、たのもしく思い候いつるに、今年九月五日、月を雲
頼 おも そうら ことしくがついつか つき くも

にかくされ、花を風にふかせて、ゆめかゆめならざるか、あわれひさしきゆめかなと、なげきおり候えば、うつつにて、すでに四十九日はせすぎぬ。まことならばいかんがせん、いかんがせん。さける花はちらずして、つぼめる花のかれたる。おいたる母はとどまりて、わかきこはさりぬ。なさけなかりける無常かな、無常かな。

かかるなさけなき国をばいといすてさせ給いて、故五郎殿の御信用ありし法華経につかせ給いて、常住不壞のりょう山浄土へまいらせさせ給え。ちちは、りょうぜんに

隠 花風 吹 夢 夢 久 夢 歎 居 現 似 駈 過 真 咲 散 蕾 枯 老 留 若 子 去 情 無 無 無 情 無 厭 捨 故 郎 殿 信 法 経 付 常 住 不 壞 霊 山 浄 土 詣 父 霊

ます。母は娑婆にとどまれり。二人の中間におわしま
す故五郎殿の心こそおもいやられて、あわれにおぼえ候
え。事多しと申せども、とどめ候い了わんぬ。恐々謹言。

十月二十四日　　日蓮　花押

上野殿母尼御前御返事